

クラブライフの提案

「ヴィラ北軽井沢エルウイング」

目次

1. 高原の料理

偶然、その日、NHKの料理番組にゲスト出演した眞下氏に出会った。彼は牧場主であって料理人ではないが、広い意味で食品に携わっているのだから、高原産の食材について、さすがによく知っておられた。

2. むしろ北海道

たまたま初秋の取材なので、気持ち良い気候であったけれど、冬季の「厳寒期」は、札幌かそれ以上で、本州にいながら北海道の雰囲気のみなぎっているエリアである。

3. エルウイング

この辺から峰の茶屋を超えて、信州側の軽井沢にかけては、13階などという高層建築はめったに建たない。自然公園法2種に準じた規制をしているのと、1000平方メートル単位の戸建て別荘が主流であるからだ。しかし、山岳の集合住宅の生活に慣れると、そうそう戸建てがいいとばかりも言えない。そうした意味でも興味深い。ちなみに近くの別荘のお客さまのご利用も多いとか。

4. 地名の由来

なぜ、北軽井沢なのだろう。地名がすごく気になった。調べてみると、信州側の軽井沢とはまた別の長いながい歴史があった。

4b. 噴火は収入減

浅間山の山麓はやせ地で樹木も思ったほど太くはない。樹木を切り開いて農地にするから、農業土木の機械がないと容易なことではない。ちなみに、江戸末期の石高を調べてみたら、とても厳しい現実があった。

5. 応桑村の誕生

文字通りの寒村に収入をもたらしたのはシルクである。応桑という地名は、シルクで2つの村を豊かにしようと、庄屋が気合を入れた「地域政策」を反映した、新しい名前であった。

5b. 北白川宮

軍服に使うウールを調達し、軍馬を育成してお役に立とうとした陸軍大将宮の開発の心ざしは、明治期の皇族の意気込みを感じさせるものがあった。

6. 館林藩入植

浅間山麓の北東側一帯は「六里ヶ原」という。ゴルフ場だといくつ分になるかはともかく、名うての広大な寒村だった。上州館林藩の旧藩士が束になって取り組んでも、そう簡単には事は運ばず、早々うまくはいかなかった。

7. 草軽電鉄

江戸時代はメインストリートであった中山道の軽井沢と、「草津千軒江戸構え」というほど栄えた草津を鉄道で結ぼうというのは、そう悪い話ではないのだが、なんといっても「事業化可能性調査」が甘かった。そのかわり東京はじめ都会にも多くのファンができた。

7b. 草軽年表

ビジネススクール(大学院専門職課程)にふさわしい事例研究になるテーマである。なぜ、当時の出資者は儲かると判断したのだろうか。ためしに解いてみては・・・？

8. 法大大学村

中山道の軽井沢の繁栄ぶりを見て、法政大学総長らが別荘開発に取り組んだ。いまなお事業としては継続している。事業としてはひよこだと思いきや、開村以来、90年近く経過している。細いはずの事業地の樹木は、うっそうと茂り、独特の雰囲気醸し出すように。

9. 一匡社

独自のコンセプトで開発した珍しい別荘地である。自他ともに許す当時の文化人が、なんとなく英国の社団法人のカントリージェントルマンをまねた感じもしなくはない。この設計に、文化学院(東京・御茶ノ水)の創立者、西村伊作が関わっていたことも意味深い。

9b. 西村伊作

あの当時、こういう人物も輩出したのである。

9c. 戦後の山麓

超・寒村「六里ヶ原」も、戦後になってやっと芽が出た感じである。日本が豊かになったひとつの証左であろう。ただし、草軽電鉄は退場してしまった。そのかわり高原野菜が高い付加価値を実現してくれた。積年の努力がやっと実を結んだというべきか。

10. 提案

原稿を書きながら考えたメモである。

11. 大規模開発

これも覚え書きである。

1. 高原の料理

【浅間高原の料理番組】

ヴィラ北軽井沢エルウイングの支配人の紹介で、雑誌「きたかる」の関係者に会おうと思い、観光案内所にてかけたところ、ほんの偶然に、この日の午後、地元 の素材を使って試作する料理番組が放映されることを知り、そしてたまたま、その番組に出演した地元数名のなかのひとりに出会った。

番組は、NHK 総合の料理番組「キッチンが走る！」。「残暑も解消 高原の創作和食 ～群馬・北軽井沢～」というもので、筆者が見たのは、13 年 9 月 10 日（火）午後 3 時ごろの全国版・再放送である。これで北軽井沢がどういうところか、多少のイメージができた。



番組に言うごとく、残暑も解消というほどに冷涼、むろん冬は極寒を覚悟、高原とはいうが、近くの別荘地を見ればわかるように、鬱蒼(うっそう)とした雑木林。それを開墾する。

樹木を伐採、倒木の枝払い、輪切り、丸太、貯木場に移動。もどって樹木の根を抜根、砂利の除去、砕土(さいど)、施肥、播種(ばしゅ/種まきのこと)。別 途に苗床で育苗、定植(ていしょく・苗を田畑に移し植え)、病虫害防除(薬剤散布)。さらに中耕(作物生育中に畝を浅く耕す)、野草刈(雑草除去)、刈草 の集荷(2 才積み)。それから収穫、作物によっていろいろ…。

機械がなければ人力＋牛馬。牛馬がなければ人力だけ。生産性が極端に落ちる。水に恵まれ気候に合わせないと何も育たない。いちいち経験していたら間に合わないから、経験を体系化して学んで補う。農業土木、農業機械などなど、いまや無用の長物みたいな農学部が重要な役割を持っていたし、農業はビジネスと見れば話は別で、形を変え再整理され残っていくであろう。

(注)番組概要は→ http://www.nhk.or.jp/kitchen-wagon/archives/index_archives130906.html



この番組に登場した地元の食材とは、花豆、牛乳、ゼラチン、ロマネスコ、キャベツである。そして出会った人とは、牛乳を作っていた眞下豊(ましもゆたか)である。

主役の野崎洋光が試作・提案した料理は、「“楽”豆腐」「きたかる畑」「花豆のおたからご飯」である。レシピはホームページにあるが、そのなかの「“楽”豆腐」をのぞき見しよう。

牛乳に酸味を入れれば、固形物と液体(whey・乳清)ができる。固形物をさらし(布)で包んで絞ってかたちを造る。このときおろし生姜を入れるのは野崎流かもしれない。

残った液体(以下ホエーという)を濾して、薄口しょうゆと酢で温め、ゼラチンを加えて炊いて、冷やして固める。これで、ホエーのゼリーができる。

つぎに、ロマネスコ、つまりはカリフラワー(ブロッコリー)の 1 種で伊語では Broccolo Romanesco という。固い外葉を乱切りにして、牛乳でゆでる。ゆであがった葉にゆで汁の牛乳を加え、ミキサーで液状にする。塩、薄口し

ようゆで味を 調べ、さらにみそを加えて、再びミキシングするのだけれど、みそをくわえるのも野崎流かもしれない。グルタミン酸狙いだろうか。ロマネスコソースという。

盛り付けは、皿にロマネスコソースを敷いて、丸い立体の形になった牛乳の固形物を載せ、その上に、ホエーのゼリーを載せる。



2. むしろ北海道

【北軽井沢はむしろ北海道に近い】

眞下はこの牛乳を作っている、正確には、牛乳の原料(生乳)を生み出す乳牛を飼育している。眞下の牛乳は格別においしいという。自然に近い状態で乳牛を飼育するからおいしい牛乳ができる。ほほかたくな信念である。バイオとエコによる酪農。ハエもいないし、特有の匂いも抑える。

多数の牛はその属性(種つけ・妊娠中・お産など)に従ってグループに分ける。北海道の気候に似た北軽井沢の立地の特徴を生かして、北海道以上のミルクを産 出しようとする。ミルクの世界で「北軽井沢」は、軽井沢の知名度をうまく使ってセールスプロモーションするのみならず、軽井沢を凌駕しブランドとして確立 している。

北軽井沢には乳牛が 3000 頭で、生乳 を日に 45 トン産出する。内、眞下は乳牛 500 頭、生乳 10 トン。他に 150 頭の子牛を北海道に預託してある。さらに規模を拡大するが、加工には興味は あっても、工場がたくさんあるので委託したほうが良いと考え、いまは手を付けない方針だ。

眞下の姓は沼田はじめ群馬に多い。父親は前橋に生まれ農家の次男で満州にわたる。終戦後の外地帰還者で、引揚して実家の前橋に戻るが、食べ物が無い上に、家に長男がいて居づらい。行くところがなく当地に入植した。若いころ学んだ山梨の専門学校の推薦で、若いころにアメリカのフィールドに学んだ。柔軟な発想 はこの辺に端緒があるかもしれない。群馬県乳牛改良協会長でもある。



畜産のほかに高原野菜が定着した。キャベツ・白菜・レタスなど葉モノ、ハニーバンタム(スイートコーン・トウモロコシ)・リンゴのような果物、花卉(かき / 観賞用栽培植物)もある。北軽井沢の作物を北海道に送るとおいしいと評価される。花も鮮やかに咲く。日較差が重要で、昼間は暑く夜が涼しく、夏でも夜露 がある。酪農で出る排泄物が堆肥になる。

旧軽井沢よりも北軽井沢のほうが 2 度は涼しいかもしれない。空気は乾いている感じだ。北軽井沢の方がより高原らしい。ただし、北軽井沢が曇っていても佐久の方が晴れていることはある。

道の里で 20-40 km 離れているだけだが、気候はだいぶ違う。

気候は札幌に近いが、札幌に比べ雪は少ない。風もそれほど強くない。北海道の雰囲気をここで味わえる。冷房機器のある家の方が少ない。暖房は重視する。慣れると東京との週 1 往復は苦にならないようだ。大学村

では、定例週末利用とか、定住例もあるし、リゾートマンションに住み着く人もいる。慣れると良さがわかる。住めば都だ。

以上は真下の話を中心に、北軽井沢を要約してみた。ただし真下は「自分は酪農家。観光は手伝っているだけ」という。

【散策・サイクリング・ドライブ】

9月上旬連休の週明け。軽井沢の混雑喧騒にくらべ、北軽井沢は閑散静寂である。避暑地の旧軽は観光地化し、むしろ北軽の静寂さを評価できるかもしれない。「避暑地の面影は旧軽より北軽に残っている」「高原の閑散期は静寂そのもので愛好家は増加している」という向きもある。

ゴールデンウィーク明けの新緑、樹木多く見事な緑に囲まれる。梅雨入り前に湯の丸のツツジも鑑賞可能。9月下旬から10月中旬の紅葉、この時期の万山望の眺望がよく、また、クルマで1時間の様



むかし草軽電鉄が走っていた。軽井沢からそれに乗って草津温泉まで行けば、3時間半はかかったし、気候にさえ恵まれれば、動く紙芝居のような感じもあったので、それで1日過ぎてしまい、草津の温泉に浸かればそれで良しとした時代もあった。北軽井沢は軽井沢駅から北に22キロ、草津温泉まで24キロ。別荘でもなければあえて降りる駅ではなかった。名山も良い。冬は晴れの日多く、星座がきわめてきれいで秀逸、天候状況を支配人に聞いてから出かけたなら会員冥利に尽きる。ただし冬のドライブは慎重に、峰の茶屋を下ってからスリップが起きやすい。

しかしいまは違う。散策・サイクリング・ドライブ。自分のからだを動かせば、することはたくさんある。ほとんど北海道なのだ。

3. エルウイング

【ヴィラ北軽井沢エルウイング】

竣工が93年1月。着工は推定91年、企画は90年。バブル後ではあるが、企画や土地取得はバブル末期であった。204ユニットのうち、分譲94、ホテル客室109、管理室1。ほかにレストラン。分譲は比較的順調に完売(すぐ売れた)。ホテル客室109は1室10名共有で、会員制1090口数に転換。約半分消化。現在450口が残る。客室稼働は年15-20%、夏季80-90%。リゾート利用者は7月で70件、8月で95件。

リピーターも少なくない。四国からいろいろなところに立ち寄って当ホテルにしばしば来館、讃岐うどんを手土産に持参する客もあれば、夏季は当ホテルに滞在・冬季はハワイに滞在という例もある。

また、大学村からも宿泊者としてたびたび訪れる。近くに別荘をもっているけれども、冬は水道工事やメンテナンスや掃除や何か大変だし、また、暮れの時期など、お友だちを連れて利用する別荘利用者もいるようだ。ホテル部分はNet送客が全体の40%。一休、じゃらん。安売りはしない方針だ。修学旅行も取らない方針だ。

提携ゴルフ場は、①軽井沢高原GC、②プレジデントCC、③プリンスランドGCなど。予約は、おおむね円滑に取れる。4月上旬から11月末。①はトリッキーではなくメンテ行き届ききれいなコース。

スキー場は、①軽井沢プリンス、②パルコール(当ホテル 8.8km、嬬恋村)。①は縦短く横長い、②は縦長く横短い。ともに難しくない。稼働期間は、①は 人工雪なので 11 月上旬から 4 月上旬、②は主に天然雪(一部人工雪)で 12 月中旬から 3 月末。北軽井沢は軽井沢より湿気は少ない感じだから、雪はサラサラ している。

近隣山岳や野反湖・ニコッコウキスゲ、白砂山など、出かける先は多い。

全室有線でインターネットが完備。客室にキッチンがあるが、火災報知機がよく作動するので、いまは宿泊客の利用を禁止している。

既述の眞下は、「北軽井沢は観光と農業で喰うしかない」という。しかし、農業の大いなる成果に比べ、街の集積をみれば、北軽井沢の観光は軽井沢の後塵を拝 している感は否めない。しかし北軽井沢は軽井沢とちがって、あたかも北海道の大地を思わせる環境にある。北軽井沢はたんに軽井沢の北なのではない。独自の シナリオを持っていたのだ。

ヴィラ北軽井沢エルウイングはそういう環境のなかで 13 階の建物なのだ。高層の建物は他には他にない。ましてその 13 階に大浴場を持つ施設はない。

【13 階大浴場】

ヴィラ北軽井沢エルウイングの建物の平面図をみると L 字型である。それで「エルウイング」というのだろう。ほぼ南向きの建物と、西向きの建物が一体になっている。その最上階(13 階)に大きな浴室が 2 つある。とくに名称はないというので、南湯と西湯としておこう。毎日男女交代で使う。両方入るには 2 泊滞在 が必要になる。大きなガラス窓から、眼下に樹海と北軽井沢の集落が、正面に山岳を眺望できる。樹海は新緑と紅葉で色を変える。



むろん浴室からの眺望は雄大である。しかしいくら雄大でも、人間は景色を 3 分も眺めていれば飽きてしまう生き物である。それだけでは大した話題にはならない。しかし、創造力を発揮して妄想をたくましく下界を見ていると、この大浴場からの眺望は飽きることがない。それどころか想像が創造を産み、予想以上に余 徳をもたらすことがある。



この大浴場の面白いところは、湯船のガラス窓の下の部分が 1 段高くなっていて、柱を背もたれにすると、ガラス窓に平行に足を延ばすことができる。西湯において、ガラス窓に向かって右側に足を延ばせば眼は北を向き、左に足を延ばせば眼は南を向き、顔をガラス窓に向ければ眼は西を見ることになる。したがって、西湯からは、南に浅間山、西に湯の丸や四阿山(あずまやさん)、北に草津白根山を見ることができる。一方、南湯はどちらを向いても浅間山となるが、さら に、窓に向かっ

て左に足を延ばせば東に鼻曲山や浅間隠山、右に足を延ばせば西に湯の丸を眺望する。

戦国時代の領分をざっといえば、浅間隠山の東方は前橋・高崎で小田原の北条が越後の上杉と争いの地、浅間山の南が武田(甲斐・山梨)、湯の丸の向こうが真田(信濃・長野)、白根の北の先がおおむね上杉(越後・新潟)である。雑駁な話、このエルウィングが北軽井沢城だったとしよう。その城主はどう治めて生き延びるか。こういう課題を解きそこなうと命がないのだから、戦国大名もなかなか厄介である。時代モノの小説はこういう風にして書いていくのであろう。

月並みに、日が南中の頃、あるいは夕刻の日の入り、あるいは早朝の月の入り、その色の変化は、その空の色合いとともに、新緑・紅葉・新雪・残雪によって樹海が色が変わる。芸術家なら、ここでなにがしか閃いて、名画・名曲が生まれる契機ともなろう。



注: 北軽井沢観光協会事務所脇にあった案内板から。

4. 地名の由来

【眼下の集落はなぜ北軽井沢?】

軽井沢は長野県北佐久郡軽井沢町大字…。旧国名は信濃(しなの)である。

この北軽井沢は群馬県吾妻郡長野原町大字北軽井沢…。上野(こうずけ)で上州(じょうしゅう)と略す。上毛(じょうもう)は上野国の別称である。群馬県の地方紙は前橋に本社のある「上毛新聞」、栃木県の地方紙は宇都宮の「下野(しもつけ)新聞」という。ただし下毛とはいわない。下毛野(しもつけの)が下野と改称したのは和銅6(713)年というから、もはやこの原稿の守備範囲ではない。

北軽井沢の集落の2013年1月の人口は1,632人、長野原町は6,222人である。軽井沢の旧軽井沢と中軽井沢の人口は6,131人、軽井沢町は19,384人。閑散とした旧草軽電鉄の北軽井沢駅舎跡やその付近のたたずまいを見るに、その都市集積はたしかに差はつきすぎた。だからあえて2番になって「北」の名称に甘んじているのだろうか。あとから触れるが、この地の開発の経緯やコンセプトは、決して、軽井沢の2番煎じではないのである。



注: 13階展望風呂から信濃国方向をみたときの、眼下の北軽井沢

そしてなぜ長野原なのか。長野が上野長野氏のことであるならば、戦国時代には消えてしまったが、前橋・高崎から西を支配した大豪族の姓である。しかし、長野原のながのは、野が長い…という地形の特徴(角川地名大辞典等)と説明する。妙高山を最高峰とし、上信国境の頸城山塊(くびきさんかい)辺りを源とする扇状地と盆地が、長く続いている形状を云うようだ。

長野原の長野に明快な説明がみあたらない。この辺には原町がふたつあって、ひとつが群馬原町、長野に近いから長野原町になったという。が、長野原村は江戸時代からあったので、この説明は多分違うであろう。角川地名大辞典の「町名の由来」では、「近世以来の村名による」とある。異説だが、例の上野長野氏の本拠地が現・長野原町のどこか、あるいは近くに在ったのかもしれない。

【全国にいくつかあった軽井沢の地名】

それでは、2番で煎じるほど、軽井沢という地名は、由緒正しく、ありがたい地名なのか。その意味するとことは、枯れた沢、荷物を担ぐ沢ともいうが、定かではない。しかし、少なくとも江戸末期(旧高旧領取調帳によれば)、軽井沢という地名は全国に数箇所存在した。岩代の大沼、羽後国の秋田・雄勝、下総の印旛、伊豆の田方、信濃の更級・小県・佐久、越後の古志、以上の各国と郡に「軽井沢村」があった。

いまでも、横浜市西区には軽井沢という町名があり、K中という愛称を持った公立の軽井沢中学校もある。大館(秋田)、鎌ヶ谷(千葉)にも軽井沢の地名は使われている。沢が枯れた状態を表象する一般的な名称のように思えてならない。

しかも、江戸末期から明治期にかけて、軽井沢は信州・佐久郡でメジャーな存在ではない。軽井沢宿が軽井沢村になるものの、1989(明治22)年には東長倉村に吸収され、そこから30年以上を要し、1923(大正12)年に軽井沢町になる。風光明媚であったようだが、好んで住む人は少なかった。

江戸末期の狩宿村・小宿村が現在の北軽井沢にあたる。その頃、我が村を呼ぶのに、隣国の一宿場町・軽井沢にちなむ習わしなど、まずはなかったはずである。

【乏しい米の収穫・北軽井沢は 220 石余】

このシリーズで飛騨の高山・ホテルアソシア高山リゾートをとりあげたとき、飛騨郷土史としてその膨大なバックナンバーを誇る雑誌『飛騨春秋』のなかの、「江戸時代の飛騨における米穀事情」(菱村正文)に注目した。その書き出しに、「下々の下国と呼ばれた飛騨国は交通不便な僻遠の地である」とあった。気になったのだが、江戸末期で飛騨は 5.7 万石(99%が高山郡代の管轄)であった。金森家のお家断絶のときが 3 万石程度であるから、江戸期でだいぶ増収した ことにはなるが、なお「下々の下国」であった。

さて、北であれなかれ、井戸の枯れた地名だから、江戸期、軽井沢がそうそう豊かなエリアではなさそうだとの見当はつく。

郡の単位では、北軽井沢のある上州・吾妻郡は 89 村で 2.5 万石、信州・佐久郡は 211 村で 9.8 万石である。国の単位で 5.7 万石の飛騨よりはよさそう であるが、吾妻郡もまたあまり米が獲れなかったのであろう。山岳地帯のなかでは、まだしも佐久郡の方が米には恵まれていた可能性はある。

現在の現代の長野原町に属する 13 か村で 1,636 石。軽井沢町に属する 9 か村で 3,328 石である。そして、江戸末期の軽井沢村 394 石、北軽井沢に該当する江戸末期の狩宿村・小宿村で 221 石。ここから半分が年貢に取られ、残りで村の何世帯の農民を養えたかは不明だが、米だけで生計の維持は難しそうである。両軽井沢とも米だけではわずかな人口しか生き延びられなかった。

そこで、宿場のサービス業と養蚕の収入が重要な糧となる。信州・軽井沢は東山道の宿場町だからまだしも、草津の温泉に湯治に行く客のためか、上州・北軽井 沢にも関所があったけれども、主街道から外れた「交通不便な僻遠の地」は否めず。いわば飛騨に準ずる貧地で、生きるためには「脱コメ」路線しかなかったようだ。

【噴火が続けば収穫減】

軽井沢から北軽井沢に入る上信国境は「峰の茶屋」付近である。日本ロマンチック街道という妙な名の道路だが、146 号線が走る。その茶屋の付近に、浅間山 山観測所(1933 年設置、東大地震研究所火山噴火予知研究センターの管轄)がある。浅間山の火口からわずか 4-5 kmである。

浅間火山のページ→

<http://www.eri.u-tokyo.ac.jp/VOLCANOES/asama/>

浅間火山の噴火記録→

http://www.eri.u-tokyo.ac.jp/VOLCANOES/asama/asama_kiroku/

浅間火山観測所の説明→

http://www.eri.u-tokyo.ac.jp/VRC/kansoku/asama_J.html

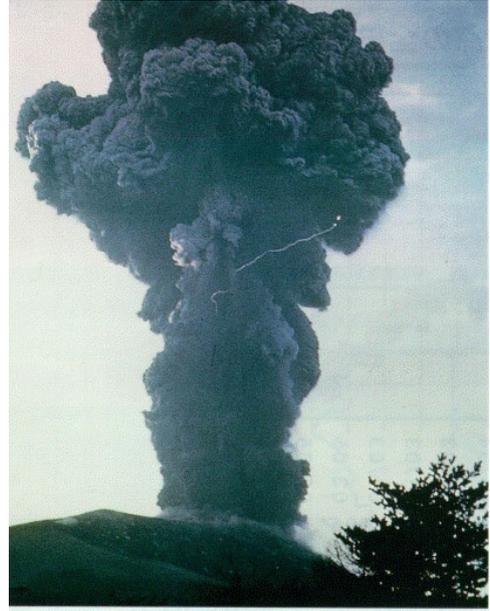
その浅間火山観測所の解説に抛れば、…浅間山は爆発的な噴火をするわが国の代表的な火山である。1108(天仁元)年と 1783 (天明 3)年の噴火では、大量の火山灰とスコリアを成層圏にあげ、山腹に火砕流を出して、広い範囲に多大の被害を生んだ…とある。スコリアは火山噴出物の一種で軽石みみたいなものである。要は、浅間山が大噴火すれば、雷が 鳴って、大きな石が飛び出し、灰が降る。

1783 年 8 月 3 日(新暦)の天明の大噴火は天仁の大噴火の半分くらいの規模といわれる。それでも、火山雷と

噴石で前掛山つまりは山の西側は火の海となり、関東平野は栃木の鬼怒川や茨城の霞ヶ浦、埼玉の北部、おそらくは江戸市中にも降灰し、昼というのに夜の如くほの暗く、爆発音は遠方まで届き江戸府内でも聞こる。ことに8月5日の大爆発と火砕流で塞がれた吾妻川は決壊、利根川にも大洪水を引き起こし、下流の江戸川まで遺体が流れてきたとか。

注：右の写真は浅間火山1973年の噴火（小山悦郎）浅間山観測所の記事から。つぎの URL に所収。

http://www.eri.u-tokyo.ac.jp/VRC/kansoku/asama_J.html



浅間は活火山、それも世界有数であるから、噴火はランダムに繰り返し、大噴火ともなれば、数か月の長期にわたり、出来事は平素予想もしないので、起きれば精神的にも影響は大きい。爆発音が240km先まで聞こえた1911（明治44）年の噴火、関東南部に降

灰したという1931（昭和6）年噴火、関東北部や福島のパ洋洋岸まで降灰した1983（昭和58）年爆発、このときも火口上に電光と火柱、浅間山腹の南斜面で山火が発生したという。

2004年9月14日15時半ごろ噴火で、火山灰がたなびく夕方の様子を、筑波から撮影した写真が、東宮昭彦（産業技術総合研究所地質調査総合センター）のホームページに掲載されている。

浅間火山のページ→

<http://staff.aist.go.jp/a.tomiya/asama.html>

近ごろでは2009年2月2日夜中の2時ごろの噴火。降灰は東京・横浜・君津に及ぶ。これでも比較的小規模な噴火という。噴火から約3時間後、JR八高線が巻き上げ降灰を、乗務員が電車床下発炎と誤認し緊急停車したというオマケがあった（毎日新聞・Wiki ニュース）

噴火の動画がUPされている。この日の01時55分から02時55分までの噴火の動画…浅間山アーカイブ動画（まえちゃんねっとカメラ2）である。

動画→

http://bousai.maechan.net/volcano/asama/maechan2/movie/20090202_0148-0248.html

さて、当時の商人はこの浅間大噴火をどうとらえたか。

【飢饉と商人】

通俗小説ながら、豪商とはいえ、高々一商人が何十万両もの大名貸ができるのかを、巧みに描いて、手形という証券と為替という信用にもとづく仕組みが、江戸時代に確立していたことを示唆する意味で、手放せない本のひとつである。

南原幹雄は『伊達藩征服』（徳間文庫、1989年）で、主人公の小右衛門（升屋の大番頭・山片蟠桃のこと）に、こういわせている。

…大阪の自宅で浅間山大噴火の地震…部下の…が意見を聞かれて、「飢饉で米が獲れないのに、大名にカネ貸して大丈夫か？ 下手したら店がつぶれる」…「米が獲れても獲れなくても仙台藩はカネが必要、必

死になってコメを集めるだろう 集まらなかったら江戸で食べる米がなくなる 集まる量が少な ければコメは値上がりする…損はしない」…

いつかはまた大噴火するであろう。大浴場の西湯に入り、柱にもたれて脚を南に伸ばしながら、危機管理の思考演習ができるというものである。

【通称六里が原は日本農業経済の限界の外】

10 世紀の 934 年、人類史上最大の噴火を起こしたアイスランドのラカギガル火山と、その近郊のグリムスヴオトン火山が 1783-85 年に噴火、「800 万トンのフッ化水素ガスと 1.2 億トンの二酸化硫黄ガス」を噴出した。噴煙は噴火対流で高度 15km に達し、粒子は北半球を覆って半球の気温を下げ、大飢 饉を引き起こした。

餓死 10 万人という江戸期の天明大飢饉もまた、このアイスランドにあるラカギガル火山・グリムスヴオトン火山の大噴火による大量のエアロゾル放出が主原因と推定されているが、これに浅間山の天明の大噴火が、天明の飢饉の規模に追い打ちをかけた。

もともとろくに米が獲れない貧しい浅間山麓で、かかる噴火が続けば、たとえば鬼押し出しひとつ見れば想像つくであろう。火砕流や洪水で田畑は壊滅、あるいは降灰で田畑は荒れるに任せ、よってますます貧しくなる。後年、日本の農地でこれ以上に痩せたところはないとさえ言わせる。そこにわずかな米が実り桑の葉 が開く。

長野原町誌(上巻 635 頁)では、「やせ 地に落ちた一粒の麦」と題して、火を噴く浅間山の東北麓、火山灰地の通称六里が原、標高 1000-1200M、気温は 30℃から▲20℃、平均 9℃、北海道は札幌以北に該当、積雪最高 70cm、無霜 100-110 日、根雪は 12 月中旬から 3 月下旬、浅間山系の痩せた火山灰土、Ph4-5 の高酸性かつ磷酸欠 乏土壌と解説し、「主穀、養蚕を主とした日本農業経済の限界の外」と集約している。

後述になるが、この日本に冠たる荒廃地に、2 度にわたって開拓団が入植し、現在の豊かな農業を実現する。しかし、それは時代を下った近年の話である。

【余談・小栗上野介のこと】

旧高旧領取調帳データベースにおいて、小栗九郎左衛門(または九郎右衛門)で検索すると吾妻郡内で 15,480 石(他に上総・市原などで 950 石)が出てくる。幕末の能吏、小栗上野介忠順の領地は、上野でも群馬・緑野両郡なので、両者の関係はよく分からない。

上野介忠順は、幕末徳川方の切れ者官僚で、1859(安政 6)年、日米修好通商条約批准使節でアメリカにわたる。後、外国奉行・海軍奉行・勘定奉行などを 務めるが、大政奉還に反対し徹底抗戦を主張、結局、自らの知行地の倉渕村(高崎市倉渕町)を流れる烏川河原で、官軍によって斬首される。おなじ幕末の能 吏、勝安房と比べたら、もともと徳川幕府のなかで家柄も良く、エリート過ぎたために、勝のように身を処せなかったのかもしれない。

しかし、明治期では大隈重信が「近代化政策は小栗の模倣」と語り、あるいは戦後、司馬遼太郎が小栗の外交能力を再評価するなど、その存在感が上昇している。享年 42。Company を「商社」と訳し、のちの銀行の創始者にもなった大番頭の三田村利八を三井組に紹介したほどのビジネス通でもある。

官軍から逃れ、万々が一、吾妻郡に潜んで、あと 10 年でも生き延びれば、北軽井沢も長野原もずいぶん得したのに…と思えてならない。



小栗ファンによる小栗上野介の解説

http://katintokei.at.webry.info/201009/article_22.html

5. 応桑村の誕生

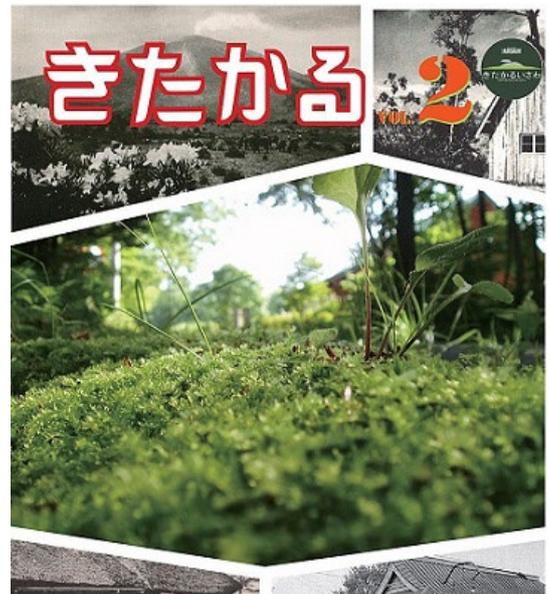
【応桑村の誕生】

ヴィラ北軽井沢エルウイング最上階大浴場の眼下に見える大字軽井沢の集落は、江戸末期は狩宿村と小宿村であった。1875(明治 8)年に合併して応桑村になり、1889(明治 22)年の合併で長野原町ができ、長野原町大字応桑となる。それが 98 年間続いたあと、1987 年に応桑の一部と他の大字の一部を加え、「大字北軽井沢」になった。

90 年バブルの真っ盛りの折りに応桑は北軽井沢になったのである。この頃はリゾート開発ブーム、この地に多くの開発プロジェクトが検討されたことと、そうそう無関係ではなかろう。

応桑村の名称は自然発生的ではなく意図的に決められた。明治 8 年、新しい村の誕生の折りその名を決めるとき、洒脱というか切実というか。栃原秀次郎なる戸長が「養蚕の大当りを念じて」、まさに応桑と名付けたものである。

応桑村の前身は狩宿村と小宿村であり、狩宿は江戸幕府直轄領で高崎の岩鼻代官所の管轄で 107.6 石、小宿は前掲小栗九郎左衛門の知行地の一部で 113.2 石であった。戸長とは 1872(明治 5)年の太政官布告により廃止された旧来の庄屋・名主にかわるものである。高々 220 石の名主の栃原としては、村人は米では食えないことを知っていたから、蚕糸絹業、ことに蚕糸業に注目、それで蚕に食させる桑の葉の生い茂ることを念じたと思われる。



江戸初期、両村を含む吾妻郡 73 か村はすべて沼田の真田伊豆守の領地であった。上田の真田本家と沼田の分家を結ぶ「信濃街道」の整備に注力したという。上田から真田氏発祥の地を経て鳥居峠を越え、田代・大笹（現・孺恋村）を通り、羽根尾から長野原草津口・川原湯温泉（現・長野原町）、中之条町、高山村を抜けて沼田に至る。Google MAP によれば、なんと 95km もある。

江戸幕府はこの信濃街道の大笹と、中山道・沓掛（現・軽井沢町）と草津温泉を結ぶ仮称・ななし街道（現・ロマンチック街道）の狩宿（現・大字北軽井沢）に 関所 を設けた。このほか、この道から須賀尾峠を越えて高崎に抜ける草津街道の途中の 大戸 にも 関所 を設けた。不便この上なく、明治期に撤廃されるのは言うまでもない。



鎌倉幕府の頃は三原庄に属するが、両村 が属していた吾妻郡自体が、碓氷郡（≡安中藩）か群馬郡（≡高崎藩）に属していたという説もある（長野原誌が応桑村史を引用）。仮に碓氷郡とするならば、名もない街道沿いではなく、立派な中山道沿い、いまの道路でいえば、当地は JR 吾妻線ないし国道 145 号線（長野原町から沼田至る一般国道）よりも、JR 北陸新幹線ないし国道 18 号線（高崎から軽井沢や長野經由上越至る一般国道）の沿道にあるほうが、あるいは都合がよかったのかもしれない。

【域外からの投資】

わずか 220 石程度の寒村・応桑村が、後年、開拓されて豊かな農業を産み、開発され、かかる別荘地に至る。その転機は何であったのか。

おそらく 4 つのエピソードが関係すると思われる。①北白川宮の畜産振興とそれを引き継いだ人々の存在、②士族授産で館林藩の旧藩士が入植し、最後まで生き残った倉田・山下の後継者の働き、③秋元子爵（旧館林藩主）の別荘、一匡社による一匡邑（むら）、松室法政大学総長による大学村、草軽軽便鉄道（後・草軽 電鉄）の開通、それらが誘発した諸開発プロジェクトの展開、④大東亜戦後の満蒙開拓引揚者…名の受け皿及びその後継者の活躍がある。

一方、信州側の軽井沢にも開発の話が持ち上がる。軽井沢開発の発端は 1886 年の A.C.シヨー（英国公使館の建築技師兼宣教師）の保養地への着眼となっているが、その前史がいくつかあり、1875 年の鳥居義処による 313 町歩の官民地取得、1882 年の稲葉正直（小諸藩家老）による長尾原牧場、1883 年の雨宮敬次郎の官民地計 1100 町歩取得、同年川上操六（陸軍大将）の矢ヶ崎牧場計画である。

1878年に地租改正があり地券が発行されるが、痩せ地でカネを産まないため、地代3%を金納できず、地券を放棄する例は少なくなかった。こうした事情は 応桑村も同様であったかと思う。この年に明治天皇が672名の官僚を伴い、北陸東海地方を巡幸、軽井沢宿で昼食、追分宿で宿泊があったが、あるいは、応桑村も皇女和宮関東下向のときのように、人・馬を供出したかもしれない。

要は、応桑村はじめ六里ヶ原の開発は、後年、軽井沢の名称にちなんだのとは異なり、信州・軽井沢とはまったく別個の経緯をたどり展開していったのである。

【閑話休題・きたかる誌のこと】

「北軽井沢じねんびと」のホームページが印象に残ったのは、ここから『きたかる』という小冊子をダウンロードしたことによる。

「北軽井沢じねんびと」のホームページ→

<http://jinenbito.jp/>

最初は、どこかの広告代理店の子会社か何かが編集した、たぶん面白くない観光地のミニコミ誌とみなして、食指が動かなかった。しかし、案に相違し、この「きたかる」は内容が良く、きわめて充実しており、とても片手間で出来る代物ではない。まずはこれを読めば北軽井沢のことは理解できる。むしろ、わがホームページはあえて制作の要なしとさえ感じたくらいだ。いったい誰がこういう読み物を作ったのか。興味津々であったし、関係者には一度会ってみたいと思った。

実はこの雑誌はいま3号まであって、ホームページからは1号と2号がダウンロードできる。1号が北軽井沢コンソーシアム協議会、2号が北軽井沢じねんびと、3号が群馬大学(以下群大)社会情報学部社会学研究室が発行したとある。

また、それぞれの企画・編集・制作は、群大社会情報学部+C、北軽井沢じねんびと、群大社会情報学部社会学研究室とあり、3号では「群大の平成23年度地域貢献事業による」とあった。

北軽井沢コンソーシアム協議会は、産(北軽井沢観光協会等)、官(長野原町)、学(群大)がメンバーとなった北軽井沢地域を調査研究する会で、2009年5月から11年4月まで活動したもので、以降は、住民組織の「北軽井沢じねんびと」に引き継がれているという。

後に登場する真下豊はその運営委員で「わくわくフェスタ」実行委員長とある。

【北白川宮の浅間牧場開発と退場】

1877(明治10)年の1月に始まった西南の役は9月に終結、1894(明治27)年の日清戦争まではだいぶ間があることになる。文明開化・殖産興業・富国強兵が一層徹底される期間だが、軍服の需要が格段に増えるので、ウール生地原料となる綿羊毛が必要になる。そこで人工的にヒツジ(綿羊)を繁殖・飼育する牧場を確保しなければならない。しかし高温多湿の日本は、低湿・冷涼な気候を好むヒツジの飼育に不適であったが、軍用毛布用原料確保のため、1875(明治8)年、大久保利通の提案で下総牧羊場(下総御料種畜牧場)を設け、ここから日本における本格的ヒツジの飼育が始まった。大久保はたとえば1876(明治9)年難航していた安積原野の1万haの大規模開発の話を知ると、ただちに実現の端緒を開こうとするほど殖産興業に熱心であった。

富国強兵の結果、必然的に生じる大量の軍服需要を充たすため、下総に続く生産拠点が必要になった。そこで新事業所を確保すべく、1880(明治13)年、内務省勸農局畜産課は用地の調査を進めた結果、浅間山麓通称六里ヶ原が適当となった。翌年、地元吾妻郡でも調査し適地との確認をし、事業者を募ったところ多数が応

募し選定に苦慮した。

そこで、81年に大日本農会会頭に就任していた北白川宮(能久親王)に一応相談したところ、なんと、「余が払下げて決行しよう」とのことである。止む無く?、六里ヶ原(後年の浅間牧場)は宮家の直営事業となった。

北白川宮には、彰義隊や奥羽越列藩同盟に擁立され東武天皇に推戴されたとか、プロイセン留学中に同国貴族未亡人と婚約して現地新聞に発表し日本政府に結婚許可を求めるも、事実上拒否され止む無く婚約解消するなど、少々かわったところがあった。

77年帰国後軍務に精励、81年に陸軍大佐、84年に少将に進級、東京鎮台長官に補職され、立派な軍人であった。一方、密かに、日本在来種軍馬の改良増殖を計画していたという。

六里ヶ原の払い下げを受けた宮家は、主監に波多野尹政(下総牧羊場2代場長・権少書記官・退職後は四谷銀行頭取)、囑託に辻正章(宮内省主馬寮技手から同 牧場技師 5 等属・1877-85 年勤務・著書に『日本牧羊問答』有隣堂など)を宛て、おもに辻の指導により整備に努めた。

1882年、下総牧羊場からヒツジ 200 頭を引取る通知を受け、羊舎建設の運びとなったが、北白川宮のヒツジをやめて馬にする意向から、牡馬 1 頭、牝馬 20 頭の払下げとなった。

92 年陸軍中将、94 年に日清戦争がはじまり、95 年近衛師団長、95 年台湾上陸と軍歴はトントン拍子だったが、同年台湾台南でマラリアに罹病、49 歳で薨去した後、陸軍大将に昇進した(北白川宮能久親王で画像検索)

しかし、宮の没後、浅間牧場の経営は難航した。宮家は牧場経営を断念し、吾妻牧場会社に払い下げた。その後、草軽軽便鉄道が所有し、さらに亀沢半次郎ら五氏に売却され、戦後の農地改革で、その小作人が所有するようになった。

あのとき、宮がおとなしくヒツジを飼育していたらどうなっていたか。戦前から戦後しばらく日本の毛織物は輸出品だった。しかし、アクリルなどの化学繊維に押され、跡形もなくなっていたかもしれない。

(注)『長野原町誌』上巻、625 頁以降などによる。

【2 軒しか残らなかった旧・館林藩士の入植】

ここで取り上げるのは、高々、没落士族が 12 戸入植して 2 戸だけ残った経過に過ぎない。六里ヶ原に格別縁故のないリゾートクラブ客にとって、ほぼどうでもいいことなのだが、眼下の北軽井沢の集落と、窓越しの六里ヶ原を見るに、また、いろいろな妄想が湧いてくる。

月並みだが、1869(明治 2)年の版籍奉還は領地と領民を天皇に返還すること、1871(明治 4)年の廃藩置県は各地の藩を廃し府・県に一元化し中央政府が統制することであった。勘の悪い向きは、幕府に代わって新政府が秩禄(華・士族に与えた家禄と賞典禄)の支給を保証してくれると考えたようだが、いかにも甘い。…いまの年金だってそのまま続くと考えるのはいささか甘い…。旧高旧領取調帳データベースでいえば、羽前国村上郡各村(現・山形市)にあった 4.6 万石ほどの館林藩領分が、館林県に移管されることを意味する。最初は館林県の知藩事は館林藩の藩主だったから、表面的には肩書が変わっただけだ。2 年後、知藩事から藩の字が取れてしまい知事になる。次第に、旧藩主とは関係ない赤の他人が中央政府によって任命される。この辺まででどうも様子が変だと気 付くべきなのだが。

1873(明治)6 年秩禄(ちつろく)奉還。華・士族の秩禄(政府が与えた家禄や賞典禄)を放棄させる代わりに、数年分の秩 禄に相当する金禄公債証書を与える。…まとまったカネを渡すから事業を起すなどして自分で稼げ…という趣旨である。しかしこれは無理というもので、定例 給与に慣れてしまった人たちにビジネスといっても、定例給与をだせる組織に勤めさせない限りは難しい…。アベノミクスの第三の矢もこのあたりが課題…。しかし

新政府の裁量は全国 3000 万石のうちの旧徳川と旗本領 800 万石に留まる。旧士族の生活よりも、財政破たんの方が重要だ。よって、1876(明治 9)年、秩禄処分を断行し全華・士族に秩禄奉還を求めた。要は、金禄公債証書を交付して、秩禄を打ち切る。その代り反動は必至で、1881 年佐賀の乱から 87 年西南戦争に至る士族の反乱の処理に追われた。例の第三の矢の促進にはこのくらいの施策が必要になるであろうが、それだけの政治力があるかどうか。そういう意味では明治維新はすごかった。

...

それで、館林藩は明治 4 年の廃藩置県で廃藩となり館林県に置き換えられた。ときの藩主秋元礼朝は遠江掛川藩主太田資始の五男で養子に來た。養父は毛利家から養子に來た秋元志朝である。志朝は禁門の変の折リスパイ容疑で隠居させられた。優れた家臣を水戸に送って学問をさせたり、河内領(館林藩は河内国・丹南・丹北・八上の各郡に約 2.5 万石の領地があった)内の天皇陵が荒れているとって修復しているから、「勤皇派」視されていたかもしれない。

家督相続した礼朝は幕府内で奏者番になる。まずはエリートポストだから佐幕派であったはずだ。しかし、1868(慶応 4)年の戊辰戦争では早々に奏者番を辞し、なんと上野・倉賀野で征東総督岩倉具視に面会、大砲 2 門と砲手 12 名、2 万両を献じて官軍派に寝返った。これは関東諸藩での最初のケースである。家臣塩谷甲介の勧めという。家臣の水戸遊学の効果が出たのか、二股かけたのか、養父のことで幕府に反感を持ったか、時代を察知したか…?

維新後、その功で賞典禄 1 万石を加増された(むろん後に証券化され秩禄金禄公債になっていく)。その後、版籍奉還で館林藩知事に任命されるも廃藩置県で免官、養子の興朝に家督を譲ったとある。子爵に収まって東京に居を構え、まずは安泰であった。

旧館林県は栃木県に編入、さらに 1876(明治 9)年群馬県に編入された。

中央政府が任命した群馬県知事は、楫取(かとり)素彦。1829 年生まれで当時 47 歳。夫人は吉田松陰の娘。毛利藩医松島瑞蟠の次男で儒官小田村家の養子。本人は明倫館司典助役兼助講から大番役で江戸藩邸勤務が契機になって明治政府に採用された。1883 年に元老院議官に就任するまで群馬県在勤は 7 年に及ぶ。県庁舎を前橋に持ってきたので、高崎ではそれ程でもないかもしれないが、よほど名知事であったようで、群馬県図書館に楫取素彦に関する資料が公開されている。その後、高等法院陪席裁判官・貴族院議員・宮中顧問官・男爵と歩んだ。維新政府になかで筋が良く、能吏であったのだろう。

群馬県立図書館のホームページ

http://www.library.pref.gunma.jp/index.php?page_id=263

館林市史編纂事業

<http://www.city.tatebayashi.gunma.jp/shishihensan/gaiyou.html>

6. 館林藩入植

【2 軒しか残らなかった旧・館林藩士の入植②】

さて、長州の典医の次男が上州の知事になるようでは、上州諸藩の旧藩士たちが陽の目を見るのが難しい。まして 1874(明治 7 年)に民間払い下げが決定した館林城が焼失。旧家臣もよるべきシンボルすらなくなった。定例給与で生活してきた全士族 42 万人(家族ともども推定 200 万人・人口の 7%という)の強制転職であるから、反乱がおきるのもやむなしであるものの、本人にしてみたら、反乱してもほとんど得るものはないという悲劇が待っている。途中で目覚めて転向して政治家になっても、薩長がおさえているから、前出の楫取の後塵を拝す

るのはなかなか難しい。

一方、事業とは、雑駁に言えば、なんらかのモノ・サービスの製造・販売である。製造・販売すべきモノ・サービスは何か。士族授産で例示されるのは、開墾して米・桑・茶を栽培し成果物を販売する、ウシ・ヒツジを飼育する、工場を建て生糸・砂糖・紅茶・絹織物・綿織物・畳表・和紙・マッチ・セメントを製造販売する、装置として汽船を購入し海運という用益を得る。しかし「資金不足や経営の不味さで失敗」「士族の商法」と書かれるが、どれをとってみても、判断を伴う処理が必要であり、その取得には経験か理論（他人の経験の集大成）の学習が不可欠である。要は、事業推進のためのノウハウなのだが、維新の士族授産だと、仕事とともに会得していく(OJT)方法しかないであろう。丁稚の修行に相当する期間が必要になるし、その間、虚心坦懐に学ぶ姿勢も必要だが、体面や性格から、短兵急に他人を雇用して頭に座ってみても、今度は組織論がいうことを聞かないから、破綻に進むしかない。倫理的には「我慢」を強いる場面だが、遺憾ながら、事業は冷酷な一面があって、我慢して得する場合と、無駄な場合がある。その見極めを、旧館林藩士たちも要求されたであろう。追加融資や補助金、現物供与や寄付などの美談はさまざま残るものの、たいていは資金繰りというけれど、つまり、カネが続くか否か、キャッシュフローに入る前に、事業は死に体だったのである。そこに悲劇が潜んでいる。

おそらく、吉川秀造『士族授産の研究』有斐閣、昭和 17 年あたりに詳しいであろう。意外にこういう本がビジネススキームの構築に、あるいは家産の来し方の整理や行く末を占うのに役に立つであろうが、ここは孫引きをご寛恕いただきたい。

維新政府の授産のポイントは、①開発先移住先の紹介（ただし介後の成績は保証せず）、②融資や補助金の整備斡旋（法人個人への家禄等担保による事業資金融資や供与）、③金融機関の整備であろう。

①以外はすべてカネメの話である。②は税金の移転だからともかく、③は他人の預金（要求払い資金）を融資するから、よほど優良な事業でなければならぬ。しかも、不換紙幣を整理し日本銀行を設立し日本円の価値を安定させるための緊縮財政が 1881-84（明治 14-17）年に実施され、激しいデフレ（物価下落）が生じることなど、世渡りに平凡な旧士族に予測できるはずもない。

このデフレ効果は借金返済組には大きな負担になった。キャッシュフローがまわるようなビジネスならいいのだが、稼げない事業で借り入れていたらひと溜りもない。「封建制度から資本主義社会への過度期」とどの教科書にも書いてあるが、書くべきは、だからこそ目端が利くか聞かないかは大きな差を生むという事実と、その身の処し方の例であろう。

まずは山片蟠桃 や三田村利ハクラスの超商人ならともかく、藩士のなれの果てや地元名望家が多少頑張ってみても、何が優良な事業なのかは分かつたはずもない。せいぜい分かるのは担保の有無であって、要は、基準が決まっている事務的判断の域を出たがらないのである。結果的にはほとんど役立たずとなる。そこで分かりやすいのは ①の開墾となる。

ただし、開墾だって開発したあと 何に使うかはあまり考えない。とりあえずは、①農地の所有につながるなら納得しやすい、②単純労働を積み重ねれば何とかなりそうだし、③少なくとも商人のまねはしたくない。きまりきった作業（ルーチンワーク）で相済ますという意味では、開墾は定例給与生活者になじみやすかったのであろう。

しかしながら森林を切り開いて農畜産用地にするといっても、それなりの技術や知識が必要で、それも含めての開拓者魂である。単純作業しかできない者もいたし、得手不得手がある。ある時期には同じ作業を集中させる必要もある。入植・開拓といえどもすべてルーチンワークでは済まされない。ひとりですべてはできない。基本は助け合い。組織が必要になる。

結局、ルーチンワーク以外の世界に飛び込みながら、組織になじめず、ルーチンワークの域を出なかつた向き

は破綻し、秩禄や金禄の公債証書は売却されて商人の所有となった。全士族と全商人とを対置するなら、大きな流れで見ると、士族の持ち分が、商人の持ち分に変った。士族の生活はさらに苦しくなり、下手すると、何も得ないまま、あるいは周囲に不幸をまき散らしながら、生涯を終える羽目になった。したがって恨みに思う者は絶えず、何とかの乱は多々起きていた。ただ革命に至らなかったのは、いわゆる大衆的支持基盤がなかった故であろう。

そこは明治政府が上手かったのである。政府の役割は、ガス抜き、不満分子の説得であった。家禄処分に異議を唱える者は家禄賞典禄処分法等により請願が許され、大蔵省は 30 万人弱の請願を審議したが、再審請求も多く、維新後 50 年余を経た 1919(大正)8 年になっても臨時秩禄処分調査会を設け理財局が事務を扱ったという。

旧士族としては反乱していても生活ができるわけではないので、よほど才覚にあった人物以外は、開墾に参加するか、軍人・教員を含む官吏(多くは下級吏員)になるしかなかった。

むろん成功例はないわけではない。水土の礎は、「静岡の茶園、岡山の紡績、広島綿糸紡績、鹿児島薩摩綿、福岡の久留米餅、石川や福井の羽二重、福島の絹織物、山形の米沢織、名古屋コーチンを生んだ養鶏業等々、いずれも士族授産を契機となってその地方の特産となり…」と列挙する。これから触れる六里ヶ原の北白川宮以降の開墾も、いまとなつてはこの成功例に何ら劣りはしない。

近代日本の礎@水土の礎ホームページ

<http://suido-ishizue.jp/kindai/index.html>

【2 軒しか残らなかった旧・館林藩士の入植③】

群馬県の東南端にある旧館林藩の藩士も明治維新で職を失った。新政府の救済策で士族授産が進められ、当初、他の藩にならって北海道へ移住する案があったが、揖取素彦(前出の群馬県知事)、平田東助(米沢藩出身だがドイツ法の専門家で当時はおそらく法制局勤務)等の斡旋で、当時北白川宮家の用地であった当所へ十年間辛抱するならば一戸当五町歩の土地をやるという約束の下に、1883(明治 16)年、旧館林藩士族倉田英雄・山下重吉ら 12 戸が、大字応桑の御所平(多分伝説であろうが鎌倉右府の狩獵地の意味)に移住した。ただし優雅な地名に反して、実りは乏しい痩せ地にかわりはない。

(注)鎌倉右府は源実朝のこと。鎌倉幕府 3 代将軍。金槐和歌集は実朝の家集。金は鎌の偏、槐は槐門で大臣の別称。別名鎌倉右大臣家集。

時期的には、松方財政のさなかであったことは、まだしも時宜を得ていた。入植にあたっての資金は、旧藩主家の秋元興朝から何がしか(金額不詳)、群馬県から営農・生活資金として 4 年分の扶持を担保に 5,000 円の融資(中村元雄知事の時代に扶持と交換し返済)、無税、群馬県から入植地付近官有林の立木伐採を 3 円(桜井伝三郎・後長野原町長から借入)のようである。10 町歩 1000 本の立木を 3 円で払下げを受けるが、その面積は事実上不問だったが、後に、倒木のみ可ということになった。まずは、そうそう返済に窮する資金ではなさそうだが、運転資金にかなり窮していて、子供に小学校に行かせることもできず、かなりひどい生活をせざるを得なかった。

移住後、入植の準備作業、つまりは原野の農地化と住む家の建設である。作業は日々広漠原野での熊笹の焼払い、伐木、抜根、土掘の連続である。町誌では、「2 ヶ年労苦の結果ようやく住宅の建築も終り、明治 18 年の秋入植することができ、開拓の根拠地を求めた」とある。

また、1887(明治 20)年 5 月 22 日付「群馬日報」に紹介して、移住 5 年後の姿を応桑村の様子とともに開拓を

伝えている。

… 応桑村は吾妻郡の北隅、中の条町から8里余、村内116戸、人口589人、9ヶ所に散在、内60名は館林旧藩士族で、政府の許可を得て5ヶ年間開墾し、15町歩余の畑地を得た。粟、稗、馬鈴薯に適する。長野県沓掛に向かう県道の中部にあり、人馬の往来が最も多い。(中略)一村あげて博愛の情深く、宮崎 菊次郎が現役歩兵の命を奉じ、高崎分営に入営するので、盛大に宴会して送り出したと紹介している。

1889(明治22)年、北白川宮が開拓地を訪れた際、「私は開墾が好きである、土の深さ三寸の処に宝がある。一生懸命で掘れば必ず宝があるから飽きずに掘れ」と諭したそうだが、お付の小野田書記官は、彼らは自分と同じ旧秋月藩の連中だが、顔色が余り良くないので、もう一度見てくるからといって、宮を待たせ、生活ぶりを見たところ、一升五厘の片栗を挽いて粉にして食べていた。これでは仕方ないので、豚や牛の仔をあげるから、これを育てて食べよと提案したところ、大きく育つまで食料が必要になる。ここには食料がない。くれるなら馬がいい。例の立木で作った炭を馬で孀恋まで持って行けば、20-25銭が70銭から1円で売れる。そうなれば馬も飼えるということだった。

このとき、小野田書記官は5円置いて、東京の秋元子爵邸に行き、実情を話して300円の支援を受け、払い下げの計画にあった群馬県の馬10頭を計90円で買い、翌年までの飼育料が計50円というので、子爵からもらった資金の残り210円を渡した。こういう美談に包まれるときもあった。しかし、当初12戸入植したが、「脱落、失業者が続出して次第に戸数が減少」し10戸が離脱、結局2戸が残った。

1893(明治26)年と推定されるが、倉田英雄と山下重吉の2戸が宮家よりは69町歩を貰い受けた。

以上は、主に、長野原町誌上巻の「開拓・入植」の章による。町誌は1976(昭和51)年に発刊されたが、1883年に六里ヶ原に入植し、いまなお営農しているのは、先の倉田英雄と山下重吉の子孫と、藤川金吉の子孫という。

小野田書記官とは、小野田元熙(もとひろ)で、館林藩下士の藤野逸平次男、小野田安兵衛の養子となり、東京府邏卒(巡查)から身を起こし、この当時は長野県書記官であった。後に、茨城・山梨・静岡など5県の知事を歴任、貴族院勅選議員で錦鶏の間祇候となり、上毛モスリン社長を5年ほど勤めている。同町誌では好人物と紹介されている。

7. 草軽電鉄

【草軽電鉄】

ヴィラ北軽井沢エルウイングの13階大浴場、西湯の正面の窓に平行に走行した鉄道で、眼下の集落にあった駅が北軽井沢駅(名称変更前は地蔵川駅)であった。駅舎と電気機関車と車両が記念に残っている。こんな儲からない鉄道を、なぜ儲かると判断したのか。まことに興味深いところである。

カブトムシという愛称をもった高原鉄道が、1962(昭和37)年まで、軽井沢と草津温泉を走っていた。おもちゃのような軽便鉄道である。

You-Tube に「草軽電鉄」とでも入れて検索すれば、いくつか動画が出てくる。なかには、懐かしの名画の一場面もある。

草軽電鉄の動画の例

<https://www.youtube.com/watch?>

この鉄道は、多分、本業の鉄道事業に関して、補助金なしでは、一回も利益を上げることはできなかったかもしれない。しかし映像はなんとかわいいのである。ちっちゃなカブトムシみたいな電気機関車が1両の客車と貨

車を連結して、ときに屋根に雪を乗せて一生懸命走る姿は、健気というしかない。脱輪もするし、雪で立往生もするから、その都度、従業員が面倒見なければならない。映像のなかには、途中で、大型の路線バスに抜かれていく光景もある。

ときどき、映画の現地撮影にも登場するのでファンが多く、意外に知名度はあったから、いざ廃業となれば、後ろ髪をひかれるのは無理もない。東急の五島慶太ですら、ギリギリまで存続を検討したという。

21 駅、55.5km(ただし 2.5~3 時間)、軌間 762mm、全線単線。東急系である。当初は蒸気機関、のちに全線電化、直流 600V であった。建設費用削減により、急曲線・スイッチバック・トンネル欠如・急勾配・道床碎石欠如・線路規格貧弱を招き、鉄道としては低速運転が必至であった。この鉄道は、多分、本業の鉄道事業に関して、補助金なしでは、一回も利益を上げることはできなかった。

事実関係はおおよそ以下のとおりである。事業のライフサイクルを想起しながら、起承転結で区切ってみた。「時勢に適せざる鉄道」が、西武や国鉄が注力したバス輸送に移って行った。しかし、事業者はどこで手元が狂ったのか？



注: 北軽井沢駅舎跡・展示された機関車

【地蔵川駅から北軽井沢駅に改称】

一匡社による一匡邑や法政大学の大学村は、この地蔵川駅周辺にあった。何もなかったところに、ぽつんと、形ばかりの駅を設けて地蔵川駅と名付け、その周りの土地を、開発希望者に売却した。もとはといえば北白川宮の広大な事業地の一部であったから、周囲に何も無いのは当然である。1927(昭和 2)年に地蔵川駅を北軽井沢に改称した。たぶん、松室の影響ではなかろうか。

掲記のように、大正 13 年、蒸気機関車の火の粉を浴びて別荘が焼けたとクレームをつけたが、どういふ風にしてかは不明だが、説得されて全線電化開通に向けた草軽電鉄の経営強化に協力し、7.9 万坪の土地を電鉄に寄付し、500 坪の別荘地がついた株式を発行させ、草軽電鉄は 130 万円の増資に成功し、翌大正 15 年、全線電化開通が実現する。

大学村が別荘分譲するのは、昭和 3 年である。買い手の多くは東京かその周辺であろうから、販売担当者が説明するにしても、地蔵川駅の近くというよりは、その頃躍進目覚ましかった軽井沢の北にある北軽井沢駅の近

くといった方が、良かったのかもしれない。

それから60年を経て、90年バブルへの上昇期、この地がリゾート開発ブームで開発対象になり、こんどは、駅名のかわりに、大字名を応桑から北軽井沢に変えてしまった。はたして良かったのかどうか？



新軽井沢方面	栗平	二度上	国境平	長日白	小瀬温泉	鶴溜	三笠	旧軽井沢	新軽井沢
草津温泉方面	吾妻	小代	嬬恋	上州三原	東三原	万座温泉口	草津前口	谷所	草津温泉
1.0	3.0	5.0	7.0	7.0	8.0	1.0	1.0	1.0	1.30

【草軽年表】

◆起

1878(明治11)年、エルウィン・ベルツが草津訪問。草津温泉を激賞。交通便利なら温泉客の増加は確実…？

1890(明治23)年、ベルツ、土地6000坪と温泉を購入。

1883-84(明治16)年、中山道碓氷峠の開削(アプト式レール敷設)進む。

1893(明治26)年、横川-軽井沢間の鉄道が開通。東京-軽井沢の所要時間は飛躍的に短縮。草津温泉客は軽井沢経由に。ただし、軽井沢から草津温泉へは馬車か徒歩。4-5人乗り馬車は輸送力に限界。鉄道を通したらいくらでも客が来る…？

1909(明治42)年、発起人草津の市川善三郎ら12人が草津興業(株)を創立。「長倉より草津に至る軽便軌条敷設申請書」を提出し、軽便軌条敷設特許を得た。

1910-11(明治43-44)年、後藤新平(鉄道院総裁)、民間の補助鉄道投資を促進。政府補助を制度化。軽便鉄道法・軽便鉄道補助法公布。

1912(大正元)年、軌道から軽便鉄道に指定換え。草津興業(株)は草津軽便鉄道(株)と名称変更。創立趣旨で顧客を①草津他沿線の旅客、②草津方面に出入する物資、③長野原・嬬恋・吾妻牧場附近より積出す木材・薪炭等と見た。株式14000株。1株5円、資本金70万円、株主321人は全国に及ぶ。平均44株、220円の出資。

1913(大正2)年、起点の新軽井沢着工。

◆承

1915(大正4)年、新軽井沢-小瀬開業。

1917(大正6)年、小瀬-吾妻間開業。

1918(大正7)年、地蔵川駅、夏期のみ臨時営業、

1919(大正8)年、地蔵川駅を常設駅に変更、吾妻-嬬恋間開業。

1923(大正 12)年、吾妻川電力により買収。同社役員河村隆実を社長。沿線 5 力所の発電所建設による資材輸送。一匡社に別荘用地売却、

1924(大正 13)年、草津電気鉄道に商号変更、電化、草津温泉延長、自動車兼営、電気事業など積極経営化。増資と社債発行。松室致(法政大学長)、蒸気機関車の火の粉による火災で抗議するも電化促進に転向し 7.9 万坪を寄付。500 坪付株式を販売し 130 万円の増資に成功。ただし、政府補助金投入後も赤字。

1926(大正 15)年、嬭恋 --草津温泉間開業し全線電化して開通。



注: 火山山麓のレモンイエロー : 草軽電鉄の記憶

その昔、浅間高原を走った軽便鉄道のこと、その模型など思いついたままに語る、鉄道青年のブログ

出典: <http://blog.livedoor.jp/tetsudoseinen/archives/22040446.html>

◆転

1927(昭和 2)年、地蔵川駅を北軽井沢に改称。

1928(昭和 3)年、松室法政大学長による大学村の第一期分譲。

1931(昭和 6)年、顕著な増客効果見られず。

1932(昭和 7)年、社債権者集会で利率の大幅引下げ決議。償還日(1934 年)を延長。1945 年まで支払猶予。

1933(昭和 8)年、東信電気が吾妻川電力を買収、

1939(昭和 14)年、日本窒素硫黄が東信電気を買収、草軽電気鉄道に社名変更、草津白根周辺鉾山の硫黄鉾石、草津温泉街用宛て食料、長野原・六合・嬭恋の農産物などの輸送を強化。

1935(昭和 15)年、渋川--草津間などに国鉄バスが運行開始。乗客減少の契機になる。

1945(昭和 20)年、全株式の 60%を占める日本窒素硫黄持株を東京急行電鉄に売却。東急系傘下。国鉄長野原線(現・JR 吾妻線)開通し、長野原--草津温泉間に国鉄バス運行。利用者は国鉄側に。

◆結

1947(昭和 22)年、補助金制度廃止。

1949(昭和 24)年、台風で多大な被害、新軽井沢 - 上州三原間の廃止決議。

1950(昭和 25)年、台風のため吾妻川橋梁流失、

1951(昭和 26)年、日本初のカラー映画『カルメン故郷に帰る』に登場。

1959(昭和 34)年、台風のため、再び吾妻川橋梁が流失。孀恋—上州三原間が不通。代行バス輸送。部分廃止。新軽井沢—上州三原間(37.9 km)営業廃止許可の答申。

1960(昭和 35)年、新軽井沢—上州三原間廃止。

1961(昭和 36)年、上州三原—草津温泉間の地方鉄道運輸営業廃止の許可答申。

1962(昭和 37)年、上州三原—草津温泉間が廃止され全線廃止。

8. 法大大学村

【法政大学の大学村】

維新後、欧米社会に匹敵する法律や司法の制度整備は急務となり、外国制度の調査と導入実施のために人材と機関が必要になった。はやくも 1871(明治 3)年、司法省明法寮(後、司法省法学校・東京大学法学部に吸収)が設置され、当初の主流はフランス法の考え方であった。明治期の法律学校もフランス法が主流で、次第に英米法、さらにはドイツ法を主力とする学校ができた。

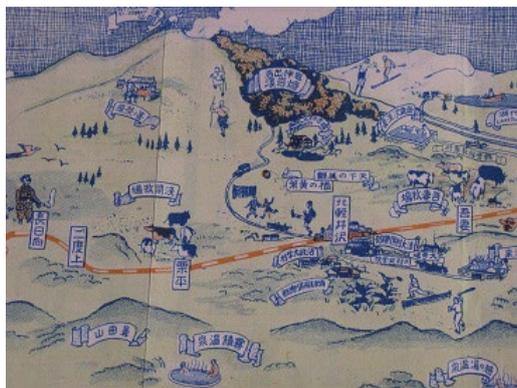
法曹とは法律を扱う専門職としてその実務に携わる者のことだが、帝大だけでは充足できず、私立の法律学校が創設された。ただ在野精神旺盛で自由民権ばかりを振り回されても困るので、東京府下に所在し、教育水準が高いとして 5 校を選び、優等卒業者に対し判事への無試験登用を認める恩典を与える代わりに、学校そのものを帝大総長の監督下に置いたのである。

さて、応桑村字地藏川(後の大字北軽井沢)の法政大学村の主役は、松室致(まつむろいたす)である。松室は、フランス法主流時代の司法省法学校の出身。同期に首席卒業の梅健次郎(後、留学したリヨン大も首席・東大教授)がいた。検事総長のとき、内外石油疑獄で桂太郎総理の指揮権により捜査を見合わせるが、第 3 次桂内閣で司法大臣のとき、判検事の大異動を行い司法界の粛清を行う。東京法学社・和仏法律学校を前身とする法政大学は最初の法律学校で、



フランス法を旨とするリベラルな校風であった。梅の後を受け、1913年に法大学長に就任し死去まで続け、この間、23年に大学村開発を手がけた。あわせて貴族院議員・枢密顧問官に登るが、治安維持法改正で死刑・無期を加えることに反対する反骨精神が残っていた。

それほど的人物が、なぜ、別荘地開発をしたのか、なぜ、応桑村字地藏川(後の大字北軽井沢)だったのか、なぜ、軽井沢ではなかったのか。どなたか興味ある方は掘り下げていただきたい。顧客に法政大学関係者が多かったとはいえ、よく倒産せずにここ



まで来たともいえよう。

大学村はこのヴィラ北軽井沢エルウイングの東隣りにある。約 200ha に 1 区画 500 坪、別荘は 300 軒と聞く。なかには定住組もあり、冬に備えて薪を積む家もある。開村以来 90 年、火山灰の痩せ地ながら樹木はうっそうと育ち、未舗装道路がそのまま残っている。

著名人も多く、野上豊一郎(能楽研究者・法大総長時に死去)の夫人野上弥生子(小説家)は、開村以来の住民で名誉村民。その離れに、安倍能成(学習院長)が皇太子を伴って訪れたというようなエピソードもある。戦後に外地引揚者で入植した世代から見れば、先住民でもある。

9. 一匡社

【一匡社の別荘開発】

長野原町誌下巻の観光の章に、長野原町大字応桑地蔵川なる浅間高原の人跡稀な僻遠の地に、1923(大正12)年7月、医学博士大村正夫を村長とする一匡邑(いっきょうむら)が誕生したとかかれてある。

この邑という字は村。現存する別荘地の名称である。運営は大分変わっている。その事業主体は一匡(いっきょう)社のようなのだが、その一匡社がよく見えてこない。加えて、一匡邑の設計が西村伊作という。大正デモクラシーを代表する文化人のひとりで、東京お茶の水の文化学院の創始者ではあるのだが、長野原町誌にはなんら名前が出てこない。

邑の母体「一匡社」の一匡とは、天下一匡、天下を匡する(≒正す)意味らしい。孔子の論語憲問第十四の十八「管仲、桓公を相けて諸侯に覇たり、天下を一匡す」から取った字で、管仲は桓公を覇者にして、天下をまっすぐに正したのだ…というような意味になろう。邑の名前にしてはひどく難しい。

一匡社は 1913(大正 2)年、東京帝大を卒業した官僚・会社員・医師らによって結成された、天下国家を憂い論ずる会員制組織で、雑誌『社会及び国家』を 発刊した。では、その雑誌はどういう記事を書いていたのか。1914(大正 3)年 11 月号から 15(大正 4)年 7 月号の巻頭記事を中心に、記事のタイトル を並べてみよう。

額田晋「伝染病研究所問題」、泉精太郎「欧洲交戦国と穀物の供給」、泉精太郎「加奈陀ケベック州の庶民銀行」、杉田直樹「独逸落ち(1)」、

泉精太郎「欧洲に於ける日本出兵論に就て」、泉精太郎「北米合衆国の棉花業者救済資金」、春山武松「絵巻物の話」、泉精太郎「独逸と食料品及原料品」、杉田直樹「独逸落ち(3)」、岸巖「机上時論」、杉田直樹「独逸落ち(4)」、於菟平「膾を吹く」、〈「ホノルル」通信(其の 2)〉、〈「ホノルル」へ(其の 1)〉、〈戦時の新聞〉、〈春宵襟筆〉、森川端夫「法文の文辞に付(1)」、某医学士談「医界漫言」、決々学人「晴耕録(玩具芸術)」、森川端夫「解散後召集せらるべき帝国議会の性質」、泉精太郎「独逸の軍事公債」、谷崎潤一郎「帳中鬼語(1)」泉精太郎「独逸の軍事公債(其 2、完)」、森川端夫「非利 的出版物の発達に付きて」、石坂泰三「米国に於ける我農民」、泉清太郎「奥匈国に於ける戦時財政経済施設(其 1)」、泉清太郎「奥匈国に於ける戦時財政経済施設(其 2)」、森川端夫「恩給制度を論ず(1)」…という感じである。

単行本も刊行していた。関口泰『民衆の立場より見たる憲法論』1921 年、松沢伝太郎『国防上及産業上より見たる各国の石油政策』1922 年、『興国経済 策としての自由港設置論』1922 年、『興国経済策としての自由港設置論』1922 年、『興国経済策としての自由港設置論』1922 年、『貴族院改革問題 と貴族制度の研究』1924 年、関口泰『選挙肅正と改正選挙法』1935 年…。著者名がないのは一匡社編であろう。

たぶん雑誌でいえば、文芸春秋、中央公論とか岩波の世界より硬めの内容なのであろう。日本の歴史や文化にこだわりながら、グローバルな視点を設定して、経済や政治・社会・国家を論じたというように見える。

以下、長野原町誌を軸に、一匡社の一匡邑をレビューしよう。創設は 1913(大正 2)年という。月一回例会、「国家及社会」発行のほかに、「有志者が贅沢 に流されず、気軽に夏を過す工夫を協議するため、組合を作り規約定款を作成して事業」を実施するという。社員の大村正夫、細貝正邦の両人が、高原で空気清 澄な浅間山麓に着目、草軽電鉄から坪 35 銭で 1 万坪買う。土地代金や会館、運動場、テニスコート等は、当地の社員全体で共同施設費として分担、各社員は 200 円宛醸出、家屋を建てるものは、平家 2 階屋の別なく、各自 1000 円を供出、大正 12 年の夏には 13 軒となった。

いくつかエピソードが載っている。別荘の管理は地元へ委嘱し、常時事務所に駐在させ、地域住民との交流を図った。電気はなく、ランプだった。草軽軽便鉄道の駅は棒材一本、地蔵川駅という名称であった。駅前には店舗ひとつなく、邑の食糧品のうち野菜は自給自足だった。邑内 3-4 箇所、道の向う側に畠を設け、馬鈴薯・いんげん・さやえんどう・ネギ、トウモロコシ等管理人が耕作した。副食はカン詰類を日本橋の間屋(野本)から一夏分一括購入直送させて、会館内の 一隅に積み上げた。鮭、鯛、でんぶ、コンビーフ/57 銭、ハム/62 銭、大和煮、オイル・サーजन、福神漬、ビワ/18 銭・パイナップルなど、欲しい缶詰 を取り出し、月日・品名・箇数をノートに記入して記名し、帰京時に清算する。この方法で一件の不正もなく、勘定はぴたりあったという。

こうしてみると、どうも一匡社は組合ということなので、無限責任社員からなる社団法人のような会員制クラブ、あるいは英国のカントリークラブなのかもしれない。無限責任社員なので、設備投資はむろんのこと、クラブでかかった費用などは一切会員が負担する。したがって、会員間には高い信頼で結ばれ、クラブは慎重に運営されることになる。

...

【一匡邑を設計した西村伊作】

軽井沢のジルヴァン美術館は文化学院の建物(1921 年西村が創立した学校で自ら設計した校舎)をほぼ再現し、1997 年に開館した美術館という。校舎は兵舎のようではなく、英国のコテージ風の楽しい建物と庭園で構成された。

さて、そのホームページでは、一匡邑の設計について、絵図を使って説明がある。ぜひそちらを見ていただきたい。

ジルヴァン美術館の一匡邑の説明

<http://www.levent.or.jp/exhibition0203.html>

「生活改善を望む人たちが集まって、小さくとも美しい理想村を作りたい」という西村の持論を活かし一匡邑を設計した。自然豊かな森に 11 戸の山荘やセンターハウスを、あたかも自然に溶け込むように配置した。共同所有の敷地には垣根を設けず、理想的なコミュニティを実現しようという意味を込めて設計した。「山荘の形は大きく 3 タイプ」「同じタイプでも外観や平面が少しずつ異なる」、「各戸には必ず大きなポーチ」「人々の社 交の場」、「各戸共通の挽き板葺き屋根を採用」などが特徴である。

...

さて、西村伊作。1884-1963 年。建築家、画家、陶芸家、詩人…。文化学院の創立者。幼少期から奇異な出来事について回る。



◆西村の年表が入る

専門課程放送・映画学科、放送・映画コースの募集を停止。

(注)大石は新宮出身。同志社英学校・神田共立学校で英語を学ぶ。1891 年渡米。ワシントン州セントポール中学入学。93 年オレゴン州立大医科入学。95 年卒業。同年モントリオール大学で外科学を学ぶ。10 月帰国。被差別部落から慕われる。患者には極めて優しく、「太平洋食堂」を開き西洋流の食生活を庶民に紹介。99 年伝染病研究のためシンガポール及びインドのボンベイ大留学。1901 年帰国。カースト制の実態から社会主義の思想に目覚める。1910 年幸徳事件(大逆事件)で検挙。11 年死刑。43 歳没。出典：

西村記念館を守り伝える会

<http://www.geocities.jp/nishimurakinenkan/isaku.html>

西村伊作

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%A5%BF%E6%9D%91%E4%BC%8A%E4%BD%9C>

文化学院

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%96%87%E5%8C%96%E5%AD%A6%E9%99%A2>

【戦後の浅間山麓開拓①】

火山灰あふれる荒野の六里ヶ原が、見渡す限り、レタス畑やキャベツ畑に変貌したのは、既述の北白川宮の牧場経営、旧館林藩士の入植に続いて取り組んだ戦後開拓の成果である。先の草軽電鉄の事業は沿線の発展に貢献したとはいえ、その経営は成功とは言い難いが、開拓に伴う農畜産業は様々な苦労を経るも、結果的には成功したといえよう。

そのむかし、NHK のラジオ放送に「尋ね人」の時間というのがあった。ラジオの聞き手が投稿し、復員兵、引揚者、シベリア抑留者、戦中の兵隊仲間など、その所在を尋ねる番組である。その外地引揚者が徒手空拳、ようやくの想いで帰国しても、GHQ の支配、食糧難・住居難・就業難・インフレ…に加え、近親者の冷たい視線のもとで、帰国後の生活の容易なことではなかった。

終戦後、深刻な食糧難を解決すべく、旧軍人・海外引揚者・戦災者を開拓事業に従事させ、もって食料を確保する国策があった。この間、入植者は 21.1 万戸、この制度が終わる 75 年で 9.3 万が継続、残存率約 44%、既存農家 105.6 万戸の分も合わせ開墾施行面積 44.9 万 ha(≒45 万町歩)の成果を上げた。

しかし個々に見ると、立地や規模、灌漑、気候、人間関係などの諸要因が相乗的にマイナスに作用し、営農放棄や全戸離村に至った例や、逆に、大規模な酪農や畜産、果樹・蔬菜の分野でブランドを確立した例、むしろ農畜産業より工場・ゴルフ場に適した例もあり、さまざまであるが、

いずれの場合にも共通して、作業に多くの困難が伴っていた。戦後の入植・開墾に伴う経験のほかに、入植前の満蒙での苦労話に加わることも多く、そのエピソードは一様ではない。

戦後開拓に 30 年間の顛末があるも、いま振り返ると、かなりのスピードで変化していた。45 年の「緊急開拓事業実施要領」は未利用旧軍用地を開拓用に供したが、46 年以降は自作農創設特別措置法により民間の未開墾地を国が強制買収し用地確保は進展したが、極端に言えば、農業未経験者を集団で軍用天幕や防空壕にいれ、ろくに食事もさせず、鋤と鍬を与えていきなり開墾を強要するようなものだから、離農者も多かった。この頃が一番大変であったのだろう。

しかし47年には復員者等の対策から「次三男対策」風に変化した。終戦直後の混乱は脱したという認識のもとで「緊急」を削除し、入植者を選抜する本格的農業振興を目指した。55年は大規模化で世界銀行融資の根拠・上北パイロットファーム、57年に八郎瀧干拓が開始。58年では戦後開拓は施策として完成視され、方針転換、61年は農業経営規模の拡大による自立経営の育成を狙い、既存農業者申請による自己調達農地で、畜産・果樹等を主眼とした農用地開発事業に変貌。63年ではむしろ不振農家には離農を勧告、69年は開拓行政を一般農政に統合(例・開拓農業協同組合の解散等)、75年に戦後開拓施策は終了し、逆に、減反政策がはじまった。

戦後の六里ヶ原の農業開発も、その前史は、こうした枠組みのなかで揉まれたのである。

【戦後の浅間山麓開拓②】

ふたたび長野原町誌に戻り入植・開拓の経緯を要約してみよう。この部分の執筆者は、当地開拓農協の清水圭太郎。時期は1972(昭和47)と推定される。

群馬の海外引揚者たちは、群馬県開拓自興会を結成し、第3の故郷(生まれ故郷→外地開拓先→引揚後の開拓先)を建設する運動に起ち上がった。「緊急開拓事業実施要領」による割り当ての結果、大屋原隣地(大字応桑字大屋原)に、第六次海倫群馬村と、第九次九道溝甘楽郷からの引揚者が入植した。海倫とは現・黒竜江省綏化市、九道溝とは黒竜江省黒河市北安市通北村と思われる。

与えられた土地は前掲のように「日本農業経済の限界の外にある地域」であって、「熊が住むので里人に恐れられている熊川のほとりから、浅間山鬼押出しのすぐ近くまでの、三十年立ちの昼なお暗い落葉松林や、里人の刈り荒らした落葉松と白樺と熊笹の繁る荒野」という。こういう荒野の開拓は、普通に育った農業者には無理であって、寒気・異境・匪賊・病魔・略奪・迫害に耐えた外地帰還者こそが最も適するとし、開拓面積にはいずれ帰還するであろう拓友(在満中応召シベリヤ捕虜抑留者の分)も含めた。

主には1926-29年に入植後は補充して、全193戸(執筆時点で167戸)。総面積約1100ha(内耕地約700ha)。農地は戸当たり平均約3.8ha、宅地は戸平均20-25aを配分し、

全員が貧乏で、厳しく長い難民生活に耐えた運命協同体的な体験がある人々の集まりであって、超インフレに味をしめた内地農家、封建遺制に見られた農業団体、富農層をバックとする指導層など、既製勢力が全く見当たらない特異集団と位置付けた。

政府の示した営農類型(≡何を作るのか)は米、麦など穀物に偏りすぎ、北軽井沢には合わない。51年から輪作試験地を設置し試作を繰り返した。53-54年の冷害は、高冷地に厳しく、尋常一様の類型では実情にあわないことが明確になった。そこで、試作結果も合わせ、「村づくり五原則」を制定した。「村づくり五原則 一、草をつくり(草地農法)二、牛をつくり(酪農)三、土をつくり(地力増進/牛の排泄物)四、村をつくり(庶民階和)五、人をつくる(人間研成)」というもで、「酸性の高い痩せた火山灰土をして生産力高い土壌とする唯一の道」と考えた。

48年、農協法施行の年である。既製勢力のない営農集団が、既存農家を再組織した一般総合農協に加わることは、はなはだ難しいと考え、開拓農協・北軽井沢開拓農業協同組合を設立した。その精神は、開拓者による「村づくり」、「蜂の如く組み(協同)蟻の如く働く(開拓営農)」の拠点である。そのためには、①良教師、②良医師、③良牧師、④良技師が必要と考えた。具体的には、こどもの教育、家族の健康、真の宗教、実力ある生産技術者の充足である。

たとえば、④良技術師とは、八ヶ年酪農草創の基礎を作ってくれた中村昭吉獣医師や土屋獣医、小柴久生人工授精師、北海道出身の長野・中原畜産指導員の協力があって吾妻酪連が育って行った。そして、酪農に加え、躍進著しい高原野菜・椎茸、観光農業の目玉に林檎・花木等がこれに続く。

原文執筆時点までの農協経営には、いくつか山場となる事件が続いた。①49年キテイ台風で新築家屋半数が全壊した。②53-54年連続冷害。これにより、当地のような二年三作地帯では収穫皆無、離農下山が十数戸に及んだ。③53年の失火による組合諸施設を焼失し、出資87万円に対し借入金480万円となった。この件で、農林中央金庫は北軽開協再起不能、組合長に辞職勧告を求めたが、i 出資金増額・赤字解消・据置貯金など諸計画の達成祈念、ii 草地農法酪農併行し高冷地野菜栽培の強化、iii 長年懸案の「地区画変更」の実施(予定入植戸数65を56に減、既入植33戸の移築で土地の再配分)で再挑戦した。④59年七号台風、伊勢湾台風による建物・設備の損害があった。⑤60-67年の「農業機械化実験集落」は、各種農業機械を数多く導入し農業近代化への契機になったが、実験の当事者には無理が祟り毎年離脱者が出て、その修復に苦慮した。

しかしこうした危機を乗り越え、67年には朝日農業賞(高冷地酪農と高原野菜の営農確立)、農政局長賞(開拓成績優秀)に浴した。

この物語は延々と続くが、明治維新このかた150年。この外地引揚者による入植・開拓は、六里ヶ原における最大の快挙ではなかろうか。

事業の経営とすれば、草軽電鉄がダメで、この入植・開拓が良かったのは、一体なぜなのか。ヴィラ北軽井沢エルウイングに数泊重ね、13階大浴場「南湯」「西湯」で想像を繰り返せば、行く末に、飛躍のためのなにか重要なヒントを与えてくれるかもしれない。

10. 提案

【リゾートライフ提案】

このホームページでいうリゾートとは、ただの観光と異なり、①同じところにたびたび訪れる、または、②同じところに1週間程度滞在するという視点を設定している。

たいていの観光客は、観光スポットを計画的に回っていく。観光はツーリズムともいう。ツアーの語源はターン、回る…である。あちらこちら訪れて見聞を広め楽しむ。

一方、リゾートは一か所に滞在する。ステイしながら付近を回ることにはあるが、基本はステイである。しかし、いつも住んでいるところと違う場所にステイする。だから、普段とは違う考え方をすることもできるかもしれない。ここに面白さを発見できるかもしれない。そうならまさに儲けもの。クラブライフに「付加価値がついた」となる。つまり、ヴィラ北軽井沢エルウイングはリゾートホテル・リゾートマンションを超えた、リゾートクラブでもある。

それがリゾートクラブの施設である以上、クラブライフに付加価値が付きやすいポイントやヒントを、施設のなかに組み込ませておくものだ。筆者の見解に拠れば、まさしくその典型が13階の大浴場にあると考えた。

思考がクリエイションする。この大浴場にはその余徳がある。環境がいつもと違う思考を促す。空想・想像が芽生える。妄想かもしれない。妄想は、またあらたな妄想を産むであろう…。それは表現の仕方で、画や写真、小説、論文、あるいは事業計画になるであろう。ただ、必ずしも紙という媒体に固定する必要はないので、気楽奔放に思考できる。

【上信国境】

現行の群馬と長野の県境は「峰の茶屋」付近であるが、なんでここに境があるのだろうか。今は昔、リゾート開発の場合は、この境で規制の仕方が異なるので、重要な問題になることがある。あずまは吾妻、東、四阿、我妻、吾嬬…と変換できる。ふつう吾妻山といえば福島だが、桐生の吾妻山は400Mしかないので小さくなっている。四阿山は上州と信州にまたがるけれども、上州側の嬬恋村では四阿山とは書かずに、吾妻山と書く。なんでこんなにややこしいことになるのか。350年ごろに実在していたかもしれない景行天皇の頃の例の伝説に端を発するようだ。

武尊が東征の折、自分のミスから海神の怒りを買って進軍に支障が出た。このとき、令夫人のおとたちばなひめ(弟橘媛)が殉死し、海神の怒りを治めたため、うまく東征できた。それで京への帰路、上信国境を超えるとき、おもわず「吾嬬ハヤ(≡わが妻よ)」と叫んだ。書き手としては令夫人ではなく愛人のほうが万葉の精神に合うような気もするのだが…、ともかく、そのためこの辺りを吾妻と呼ぶ。ただし、この山を「あずまさん」というものの、信濃側では「四阿山」、上野側では「吾妻山」と書かせ、後年、成務天皇が本山鳥居峠を挟んで上州と信濃に吾妻神社を作り、この境と書き方を追認したのだという。むろん、伝説だからどこまで本当かどうかは分からないが、上野と信濃の境は山の尾根ということで昔から決まっていたようだ。ただ豪族や大名の領地がこうした境を超えることは往々にしてあることで、あとから事務的に整理するとき、この境がなにかの方便で活きたりするるのである。

【地盤】

かつて眼下に草軽電気鉄道が走っていた。当時の事業家たちはこれが採算に合うと判断したのだ。その根拠はどこにあったのだろうか。浅間山麓もまた西武の堤と東急の五島の競合地域であった。堤は近江だが、五島は信州・青木村(エルウイング西湯の正面に見える湯の丸を下り真田・上田を経て至る)の生まれで、後に沼田の五島家の養子になる。また、北軽井沢を含む吾妻エリアは小淵恵三の選挙区であり、浅間を越えた軽井沢から上田の一角は羽田孜の地盤で、現在は、小淵優子と羽田雄一郎(衆議院は孜の元秘書の寺島義幸)がそれぞれ継承する。「地域とは何か」とか「キャリアプラン」を考えると、単に妄想では済まない何か潜んでいる。

まさしく、ヴィラ北軽井沢エルウイングの13階の「南湯」「西湯」は、豊かな妄想を引き起こす材料を窓外に揃えている。設計者はそこまで計算に入れたのであろうか。

11. 大規模開発

【大規模開発】

なぜ、穴吹は北軽だったのか。企画したのは、推定バブル末期。旧軽の土地はまだ高かった、旧軽は、規制が多すぎた。無指定→高層集合住宅は北軽なら可能。

10階を超えるホテル・リゾートマンションは、軽井沢には存在せず、北軽井沢に2件あり、最上階に大浴場があるのは、ここヴィラ北軽井沢エルウイングのみである。軽井沢町は都市計画法などの他、長野県の景観条例・自然環境保全条例、また町の自然保護対策要綱などを組み合わせて、かつての記憶をたどれば、ほぼ全域に自然公園法の第二種特別地域に相当する規制を敷いていた。風致維持上からも、高層のリゾートマンションや高層のホテルのような建物は難しいことになる。2種は産業開発について「風致維持上必要ある場合は制

限」するが、「産業的利用との間につとめて調整をはかる」とある。この辺は、軽井沢町(長野 県)と長野原町(群馬県)の自治(Autonomy)の差であり、外来者にとっては好み次第である。

12b: プラザ合意以降のリゾート開発ブームの頃、開発用地が乏しく、かつ、何かと規制の厳しい軽井沢(長野)を越えて、用地が比較的豊富で若干にせよ緩やかな長野原(群馬)側に開発プロジェクトが集まったのは無理からぬことだ。かつて、関東のゴルフコース開発案件が50号線→栃木北部→福島南部と北上していったのと同じである。ただ、長野のゴルフコース開発で、事前協議がある程度進んだ案件のうち、ダメになったのは、規制ではなく、土地取得の同意・買収がうまくいかない、あるいは資金繰りがつかなかった故だともいう。よって、信州の規制が一般的に厳しいのではなく、軽井沢が箱根や鎌倉・京都と同じような特殊事情で厳しいのだと解すべきかもしれない。いにしえから事業所が集積し、うまくいっている所は、どうしても規制を厳しくし、現状の維持を図ろうとしがちだ。

【リゾートマンション概要】

リゾートマンションとしての概要 ⇒

<http://www.himawari.com/karuizawa/mansion/3287.html>

<http://www.tokyu-resort.co.jp/detail/p/00392>

群馬県吾妻郡長野原町大字北軽井沢字大屋原 1924 番 172 。しなの鉄道「中軽井沢駅」車 19km 29 分。上信越自動車道「碓氷・軽井沢 IC」より約 35km 車で約 53 分。コンビニエンスストア 車 2 分。1993 年(平成 5)年 11 月 / 築 19 年。施工・井上工業。鉄骨・鉄筋コンクリート造 13 階建。205 戸(分譲 94 戸・ホテル客室 109 戸・管理室・レストラン各々 1 戸)。用途・無指定。所有権。電気 / 東京電力、ガス / プロパンガス、飲用水 / 公営水道、排水 / 集中浄化槽。地デジ・BS 対応。インターネット環境・ADSL(戸別契約可)。管理会社・管理者:株式会社ヴィラ北軽井沢(自主管理)、管理員勤務形態 / 常駐 フロント営業時間 7 時~22 時 ※22 時~翌朝 7 時は夜間宿直者が対応。オートロック・通年 22 時~翌朝 7 時。駐車場・屋外 70 台(無料)。駐輪場 なし。大浴場・沸かし湯 展望大浴場・サウナ・ジャグジー・かぶり湯・水風呂 7 時~11 時(又は 6 時~10 時) / 15 時~24 時)。プール(クア)なし。和食・焼肉。テニスコート 2 千円/1 時間、スキーロッカー 20 戸。ラウンジ・カラオケルーム(有料)。ペット不可。最終更新日 : 2012 年 10 月 9 日。以上ひまわり軽井沢店。

.....

… 土地敷地面積 / (公簿) 8,780.00m² (2,655.95 坪)。分譲会社 / (株) 穴吹工務店。施工・井上工業(株)。管理会社 / 管理運営(株) ヴィラ北軽井沢。管理形態・方式 / 全部委託・常駐。総戸数 / 205 戸。構造 / 鉄骨鉄筋コンクリート造地下 1 階付 13 階建。建築 / H5 年 1 月。設備・東京電力、LPガス集中、町営水道、ガス湯沸器、排水 / 集中浄化槽、汚水 / ー、エレベーター / 3 基、駐車場 / 107 / 無料。都市計画法 / 都市計画区域内非線引区域・用途地域 / 指定なし。最終更新日: 2013 年 09 月 10 日。売り・① 1LDK - 45 m²、480M。管理費 34,231。② 1LDK + ファミリースペース 73 m²、650M、管理費 53,831。③ 1LDK、81 m²、650M、管・52,705。以上東急不。